

研究ノート

ジャン＝リュック・ナンシー 『コルプス』 注解 (一)

柿 並 良 佑

本稿はフランスの哲学者ジャン＝リュック・ナンシー (Jean-Luc Nancy, 1940-2021) が1992年に発表した著作『コルプス』に注解を施すものである。底本として以下を用いる。Jean-Luc Nancy, *Corpus*, Métailié, Paris, 1992 ; 2^e éd., 2000 ; 3^e éd., 2006. 既訳として以下がある。ジャン＝リュック・ナンシー 『共同 - 体』大西雅一郎訳, 松籟社, 1996年。

注解にあたっては英語版論集 *The Birth to Presence*, Stanford University Press, Stanford, 1993に収録された初出版, および英仏対訳版 (trans. by Richard Land, Fordham University Press, New York, 2008), 独訳 (übers. von Nils Hodyas und Timo Obergöker, Diaphanes, Berlin, 2003) を適宜参照する。初出版は以下の論集に再録されている。 *Thinking Bodies*, Juliet Flower MacCannell and Laura Zakarin (eds.), Stanford University Press, 1994.

全体は34の節に分かたれ, 2000年の第2版で「魂について De l'âme」と題された1994年の講演を元にしたテキスト (p. 107-129), 2006年の第3版で「魂の拡張 Extension de l'âme」 (p. 130-144) ならびに「身体についての58の手がかり 58 indices sur le corps」 (p. 145-162) と題するテキストが収録された。

注解に先立ち、『コルプス』で対象となる様々な「体」の含意が把握できるよう, 水谷智洋編『羅和辞典』(研究社, 2009年)の corpus の項目全体を引いておく。

corpus 1 身体, 肉体. 2 肉. 3 死体. 4 胴体. 5 人. 6 骨組み. 7 物体, 物質. 8 組織体, 統一体: totum ~ reipublicae (Cic) 国家の全体. 9 全集, 集成: ~ omnis Romani juris (Liv) 全ローマ法典 (=十二表法) / Corpus Juris (Cod Just) ローマ法大全. 10° 『解』体: ~ pineale 松果体 / ~ striatum 線条体 / ~ ciliare 毛様体.

第一の節は書名と同じく「コルプス Corpus」と題されている。まず冒頭の段落の試訳を掲げる。

コルプス

コレハ真ニ私ノ体デアル¹, 我々の由来となった文化では, 典礼の際にこの言葉が口にさ

れてきたのだらう、倦まずたゆまず、何百万と執り行わる祭儀に携わる何百万もの司祭によって。この文化では、キリスト教徒であろうとなかろうと、皆がそれを知っている（し認めている）。キリスト教徒の間では、真の聖別²という価値をそこに付与する者もいれば——神の身体が現にそこに³ある——、象徴という価値を付与する者もいる——その場合は神のうちで一体となる者たちが聖体拝領し合一する⁴。この言葉は我々の間では、しぶとく生き残った異教、あるいは昇華した異教が非常に目立つ形で反復されたものでもある。すなわちパンと葡萄酒、その他の神々⁵がもつ他の身体、感覺的確信⁵の神秘のことだ。先の言葉はもしかすると、我々が言葉の連なり^フを交わす空間の中では、すぐれて反復そのもの^レなのかもしれない、強迫観念に至るほどの——そして「これは私の体である」がすぐさま大量の冗談として使い回されるようになるまでに⁶。

注解

1. 「コレハ真ニ私ノ体デアル」*Hoc est enim corpus meum* : 「最後の晩餐」のエピソードにみられる言葉。「マタイによる福音書」26:26, 「マルコによる福音書」14:22, 「ルカによる福音書」22:19 (および「ヨハネによる福音書」6:53, 54を参照)。

ただし「ウルガタ」のテキストには、「真に」あるいは「～であるから」を意味する副詞 *enim* はなく、ナンシーが提示しているのはいわゆる「トリエント・ミサ」で用いられるフレーズ。Cf. T. Baldwin, J. Fowler, S. Weller (eds.), *The Flesh in the Text*, Peter Lang, 2007, p. 250. 以下に変遷が記述されている。“On transubstantiation”, *British Magazine*, July 1, 1840, pp. 10-11.

したがってここで、さらには本書全体を通じて取り組まれるのは、聖書というテキストの特定の箇所ではなく、それを元にして構築されたキリスト教の典礼が織りなす〈西洋〉文化の総体ということになる。

2. 「真の聖別」*consécration réelle* : 「真の」と訳した形容詞 *réel* について、ナンシーによる「実在的現前 *présence réelle*」への言及を参照。『訪問』西山達也訳、松籟社、2003年、29頁。
3. 「現にそこに」*là* : 通常は「そこ」を示す副詞だが、フランス語の哲学言語では「現存在 *Dasein*」の訳語 *être-là* などの形でも用いられる。この副詞は後段の記述でも強調されて用いられる。
4. 「聖体拝領し合一する」: 原文では動詞 *communier* の一語。
5. 「感覺的確信」*la certitude sensible* : ヘーゲル『精神現象学』序盤の議論を示唆。

6. 「これは私の体である」« ceci est mon corps » : 聖書の一節をめぐる「冗談 plaisanteries」の有名な例としては「これはパイプではない」« Ceci n'est pas une pipe. » がすぐに連想される。その他、石川知広「これはパンではない——マグリットのパイプ絵と神の躰」、『人文学報』東京都立大学、第246号、1993年、22頁以下；ルイ・マラン『食べられる言葉』梶野吉郎訳、法政大学出版局、第一章をも参照。

(第2段落)

それは我々のオム・マニ・パドメ……¹、我々のアッラー・イッラッラー……²、我々のシェマー・イスラエル……³。だがそれらと我々の定式の隔たり⁴から、すぐさま我々にとって最も固有な差異が見積もられる。すなわち我々はこれ [ceci] を示すことに取り憑かれており、また取り憑かれたように(自らに)納得させようとしているのは、ここでは当のこれは、ここでも別のところでも、見ることも、触れることも、できないものであること——さらに、これは、どのような仕方でもよいのではなく、自らの身体として、それ [cela] であるということだ。ソレ⁵ (そう言いたければ神、絶対的なもの)の身体、加えてソレが一つの身体を持つこと、あるいはソレが身体であること(ゆえにこう考えられるだろう、ソレこそが身体なるものである、絶対的に)、こうしたことが我々の強迫観念なのだ。すぐれて〈不在なるもの〉の現前化されたこれ、倦むことなくそれを我々は呼び求め、召喚し、聖別し、臨検し、捕捉し、欲し、絶対的に欲したということになるのだろう。安心を、〈ほらここに〉⁶が示す混じり気のない確信を欲したのだろう。ほらここに、ただそれだけ、絶対的に、ほらここに、ここに、これ、同じものが。

注解

1. 「オム・マニ・パドメ」om mani padme : 実際には om mani padme hum の形で、チベット・モンゴル・ネパールの仏教徒が祈りの際に唱える名号。チベット語で六文字(唵麼呢鉢訥銘吽あるいは唵嘛呢叭咪吽)となることから六字真言とも呼ばれる。
2. 「アッラー・イッラッラー」Allah ill'allah : 「アッラーの他に神はなし」を意味する。シャハーダ(信仰告白)では「ラー・イラーハ・イッラッラー」La ilaha illa Allah の形で唱えられる。
3. 「シェマー・イスラエル」Schema Israël : 「イスラエルよ、聞け」の意。典拠となる「申命記」6 : 4-5 が「シェマ」と呼ばれ、安息日の礼拝で幾度も朗唱される。

以上3つの「定式 formule」は「コレハ真ニ私ノ体デアル」に対応するものとして挙げられ

ているが、直後の記述にあるようにその中の「これ hoc/ceci」が3者との顕著な違いを示すものとして強調される。

4. 「隔たり」l'écart：後にしばしば用いられる本書の鍵語の一つ。

5. 「ソレ」ça：もとは直前にある cela の短縮形で（ceci と cela は近くのものと同離れたものを対比的に指す）、日常的に広く物事を表す。ただし、精神分析に言う「エス」の仏訳語でもあり、本書では随所でその含意を有して用いられる。下記第5段落の「不安」l'angoisse といった語とも連動する。

デカルト論での言及として以下。Jean-Luc Nancy, *Ego sum*, Flammarion, 1979, p. 31. 『エゴ・スム』庄田常勝・三浦要訳、朝日出版社、1986年、47頁。身体論における用法として以下を参照。Cf. *Allitérations. Conversations sur la danse*, avec Mathilde Monnier, Galilée, 2005, p. 33, 119 et 145. 『ダンスについての対話——アリテラシオン』大西雅一郎・松下彩子訳、現代企画室、2006年、37,157,195頁。

6. 「ほらここに」voici：「ここに…がある、これが…である」を意味する副詞的前置詞 voici は動詞 voir の命令法 vois と副詞 ci からなる。この段落では ceci, ici, voici という指示語の連関が織りなす特権的な「これ」や「ここ」としての身体が問題になっている。ヘーゲル『精神現象学』の「感覚的確信」の章の「このもの」das Diese も le ceci と訳される。

（第3段落）

「コレハ真ニ……」は^{みかけ}仮象に対する我々の疑念すべてに立ち向かい、これを和らげるのであって、現実界に純粋なアイデアを施して真の^{タッヂ}仕上げを行う¹。すなわちその現実性、実存を与えるわけだ。この言葉を変様させて様々な異本を引き出そうとすれば切りがあるまい（思いつくままに言えば、エゴ・スム、絵画における裸体、『社会契約論』、ニーチェの狂気、『エッセー』、『神経の秤』²、「ボヴァリー夫人、それは私だ」、ルイ16世の頭、ヴェサリウスやレオナルドの図版³、声——カストラート、ソプラノ等々の——、考える葦、ヒステリー患者、実のところ、これらが丸ごと織物となって我々を織りなしている……。「コレハ真ニ……」から生成しうるのは、西洋の〈諸学と技芸と思想の大百科全書〉の**コルプス**全体だ⁴。

注解

1. 「現実界に純粋なアイデアを施して真の仕上げを行う」 donne[r] au réel la vraie dernière touche

de son Idée pure: le réel は「現実的なもの」を総称的に指すと解し、一定の範囲を示すように「界」の字を用いたが、この表現のラカンの用法に沿うものではない。後に出てくる「現実性」は la réalité。

「仕上げ touche」については donner la touche finale (= mettre un point final) という表現を踏まえた言い方と思われる。

Idée は「理念」とも訳しうるが、後述のプラトニズムとの連関を想起させるところがあり、「イデア」と解する。

2. 「神経の秤」le Pèse-nerfs: このアルトーの表現は本書「神秘？」の節にも見られる。出典は以下。Antonin Artaud, *Œuvres*, Gallimard, coll. « Quarto », 2004, p. 165. 『神経の秤・冥府の臍』粟津則雄・清水徹編訳, 現代思潮社, 1971年, 132頁 (26頁をも参照); 『ヴァン・ゴッホ』粟津則雄訳, ちくま学芸文庫, 1997年, 96頁。
3. 「ヴェサリウスやレオナルドの図版」les planches de Vésale ou de Léonard: ヴェサリウス (André Vésale, 1514-1564) の『人体の構造について』*De humani corporis fabrica libri septem* やダ・ヴィンチ (Léonard de Vinci, 1452-1519) の「ウイトルウィウスの人体図」(l'homme de Vitruve ; le proporzioni del corpo umano secondo Vitruvio) などを示唆。
4. 「大百科全書」une Encyclopédie Générale des Sciences, des Arts et des Pensées: デイドロとダランベールが編集した『百科全書』の正式名称は Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers であり、これになぞらえて西洋文化の集成 = コルプスを形容する。

(第4-5段落)

身体なるもの、我々がそれを発明した次第は以上のとおりだ。一体全体誰がそれを知っているだろうか。

だがもちろん、恐るべき不安が透けて見える。「ほらここに」はそれゆえ確かではなく、確かめなければならないものだ。物そのもの¹が現にそこにありうるということは確実ではない。現にそこ², 我々がいるそこは、ただ単に何かの反映、漂う影でしかないのかもしれない。こう力説しなければならない、「コレハ真ニ、あなた方に言おう、実のところ = 真理において³, かつ私があなた方に言おう、血も肉もある我が現前⁴について誰が私よりも確信しうるのか? と。かくして、こうした確信はあなた方の確信、あなた方がやがて体内化してしまうこの身体と共にある、あなた方の確信となろう」。だが不安が止むことはない。こ

れ [ceci] は何なのか、身体であるこれとは？ これ、私があなた方に示すこれ、だが、一切の「これ」とは？「これ」の、さらには数々の「これ」の未規定態全体とは？ 一切のソレ⁵とは？ 触れられるやいなや、感覚的確信は一転カオスに変わり、嵐に変わり、すべての感覚は変調をきたす。

注解

1. 「物そのもの」 *la chose même* : 第2段落最後の表現「同じもの」 *la même chose* を踏まえる。
2. 「現にそこ」 *là* : 第1段落、注解3を参照。
3. 「実のところ」 *en vérité* : *enim* に対応する仏語表現だが、文字どおりには「真理において」と読むことができる。身体の「真理 *vérité*」をめぐる伝統的な問題系について、例えば「栄光の身体」第3段落、「受肉」第1段落、「意味作用する身体」第3段落を参照 (p. 56, 58 et 61)。
4. 「血も肉もある我が現前」 *ma présence en chair et en sang* : 「血も涙もある = 生身の」 *de chair et de sang (d'os)* , 「(写真や空想ではなく) まさにその」 *en chair et en os* といった表現を踏まえて現前そのものを強調するが、まさしく私の身体が「血肉」化していることを文字どおり示す。
5. 「一切のソレ」 *tout ça* : 話題になっていることを指して「そうしたもの／ことすべて」を意味するありふれた表現だが、第2段落、注解5を参照。

(第6-7段落)

身体とは茫然自失し破片となって碎け散った確信のことだ¹。それ以上に固有のものはない。我らが老いた世界²にとってそれ以上に異質なものはない。

固有の身体、異物³。「コレハ真ニ」が示し、触れさせ、食べるべくして差し出すものこそまさに固有の身体だ。固有の身体、あるいは〈固有性〉そのもの、身体となった〈自己への存在〉⁴。だが目下、相変わらず、それは飲み込むことができないものとして自らを示し、驚異として怪示する一つの異物なのだ⁵。誰もこの状況から抜け出してはいない、人々が嵌まり込んだ雑然たるイメージの屑山に映し出されるのは自らの種無しパンのことを夢想するキリストから、息を切らし血に染まる御心を手ずから摘出するキリストまで様々だ。これ、これは……、これ [ceci] はソレであるためには常にあまりに多かったり、十分でなかったりする。

注解

1. 「身体というのは茫然自失し破片となって砕け散った確信のことだ」 Corps est la certitude sidérée, mise en éclats : sidérer は口語で「唖然とさせる」の意だが、語源的には「星から影響を受ける」ことを意味し、次節「奇妙な異物」にみえる「災厄の」*désastreux*, 「災厄」*désastre* といった語と連動する。

ナンシーが多用する名詞 *éclat* は「破片」, 「大きな音」, 「輝き」等を示す語で、『有限な思考』所収の「砕け散って輝く愛」*« L'amour en éclats »* のようにタイトルに掲げられることもある。「思考」, 「栄光の身体」, 「些細な濫費」, 「コルプス」の節、および「58の手がかり」をも参照 (p. 35, 56, 89, 105, 148, 151 et 161)。動詞 *éclater* については以下。*Allitérations, op. cit.*, p. 68 et 115. 『アリテラシオン』前掲邦訳, 86, 151頁。

2. 「我らが老いた世界」*notre vieux monde* : 通常 *vieux Monde* (ないし *ancien Monde*) はいわゆる「旧大陸・旧世界」を指すが、ここでは新世界=アメリカ大陸との対比よりも、後者を含め、身体をめぐる伝統の重さを担わされ、文字どおり「老いた」世界を指すものと解する。

3. 「異物」*corps étranger* : 体内に侵入した「異物」、あるいは比喩的に「異分子」を指すが、文字どおりには直前の「固有の身体」*corps propre* と対比して「異質な身体」と読みうる。

4. 「身体となった〈自己への存在〉」*l'Être-à-Soi en corps* : 通常、*en corps* は「一団となって」を意味するイデオロム。「固有の身体」(*le corps propre*) と「異質な身体」(*le corps étranger*) の差異がかき乱され、「〈固有性/所有〉」*la Propriété* と化した即自的な存在への消化・昇華が目指されるが、その運動には次の文で即座に留保を付される。

ナンシーは他処で「自己へ」*l'à-soi* の運動を別様に把握し直すが (cf. *Le sens du monde*, Galilée, 1993, p. 28, 48, 56, 102, 103, 112, 196-197, 212, 230, 233 et 235), ここではいわゆる「即自」*l'en-soi* に近い意味で解しているように思われる。

5. 「それは飲み込むことができないものとして自らを示し、驚異として怪示する一つの異物なのだ」*c'est un corps étranger qui se montre, monstre impossible à avaler : se montrer impossible...* という表現を念頭に置き、動詞 *montrer* を *monstrer* と言い換えたものと読む。後者は前者の古形。Cf. A. J. Greimas & T. M. Keane, *Dictionnaire du moyen français. La Renaissance*, Larousse, 1992, p. 421. *monstre* および *monstration* の含意については例えば以下を参照。Jean-Luc Nancy, *Au fond des images*, Galilée, 2003, p. 38, 46-47, 122, 157-158, 165 et 174. 『イメージの奥底で』西山達也・大道寺玲央訳, 以文社, 2006年, 42, 52-53, 142, 188, 190, 198, 209頁。Id. *Les Muses*,

Galilée, rééd., 2001, p. 123. 『ミューズたち』 荻野厚志訳, 月曜社, 2018年, 162頁。

英仏対訳版は the body on display is foreign, a monster that can't be swallowed, 独訳は ein fremder Körper, der sich zeigt, ein Monstrum, das sich nicht schlucken läßt と monstre を名詞に解するが, ここでは (再帰代名詞 se が繰り返されていないという憾みは残るものの) 上記の読み方を採った。

(第8-10段落)

それに「固有の身体」¹をめぐるすべての思考, 「客観化された」あるいは「事物化された」と不愉快に思われていたものを固有化し直すための労多き努力, 固有の身体をめぐるそうしたすべての思考は, いずれもそれぞれに相当する歪曲である。つまり, 行き着く先はただ, 望まれていた当のそれ [cela] を排泄することに他ならない。

神の身体を見よう, 触れて食べようとする不安と欲望, この身体であり, ソレであるしかないという不安と欲望が, 西洋の (非) 理性原理²をなしている。だから身体は, いくらかの身体は西洋では決して生じない³, とりわけ西洋でそれを名指し召喚する時には。我々にとって, 身体は常に犠牲にされている, すなわちホスチア。

「コレハ真ニ私ノ体デアル」が何かを言うのは, 言葉の外でのこと, それは言われるのではなく, 外記される⁴——必死の体^{てい}で⁵。

注解

1. 「固有の身体」[le] « corps propre »: 特に現象学における問題系が示唆される。「他ナル」, 「ブラックホール」の節などを参照 (p. 28, 66, 117, 135 et 151)。
2. 「(非) 理性原理」le principe de (dé) raison: 精神分析に言う「快原理 (快感原則)」le principe de plaisir を想起させもするが, ハイデガー『根拠律』*Der Satz von Grund* (1957) の仏訳タイトルにもなっている表現 *Le principe de raison* (Gallimard, 1962) が踏まえられているものと思われる。déraison は今日ではあまり用いられなくなった名詞だが, フーコーによる分析がよく知られている。Cf. Michel Foucault, *Histoire de la folie à l'âge classique*, Gallimard, coll. « tel », 1976, p. 147, 208-209, 265, 310, 428, 472, 632 et 651. 『狂気の歴史』田村俣訳, 新潮社, 1975年, 128, 181, 229, 265, 360, 399, 530, 549頁。
3. 「決して生じない」*n'y a jamais lieu*: イディオム avoir lieu は文字どおりには「場を持つこと」を意味する。名詞 lieu は本書の鍵語であり, 「尾もなく頭もなく」, 「ブシューケーは延長されて

いる」, 「エゴ」, 「身体の世界来たりて」, 「栄光の身体」, 「意味作用する身体」, 「傷」, 「身体
のテクネー」, 「不浄の世界」, 「一つの身体は一つの思考の無 - 限である」, 「コルプス：皮質」
の節で特に強調される (p. 16, 22, 26, 37, 55, 64, 67, 79, 92, 99 et 102)。

4. 「外記される」 *c'est excrit* : 動詞 *excire* は *ex-* と *écrire* をかけ合わせて用いられる, この時期
のナンシーの鍵語。名詞形 *excription*。

「単なるインクの染みが語からはみ出して広がるように, 意味 *sens* の全体が「意味」とい
う語からはみ出し, 自分自身の外へと広がっていく。意味のこのような横溢 *renversement* が
意味を成すのだが, こうした意味の横溢もしくは, それ自身のエクリチュールの源泉の不
分明さへの意味のこの横溢, それを私は外記 *l'excrit* と言う」 (*Une pensée finie*, Galilée, 1990,
p. 55. 『限りある思考』合田正人訳, 法政大学出版局, 2011年, 59頁)。

「「外記」 *l'« excription »* は, 物の名前が, 自らを内記 [=刻印=登録 *s'inscrire*] しながら,
名前の固有性を自分自身の外へ, 名前だけが示す外へ内記することを意味する」 (*ibid.*, p. 208. 同,
244頁)。

5. 「必死の体で」 *à corps perdu* : 「必死で, 危険を顧みず」を意味するイディオムだが, 文字ど
おりには「体を失って」。

(続)

Commentarium in Johannis-Lucae Nanceii *Corpus* (1)

Ryosuke KAKINAMI

Nous présentons ici le commentaire de *Corpus*, ouvrage écrit par le philosophe français Jean-Luc Nancy au début des années 1990 et continuant de susciter de l'intérêt chez de nombreux lecteurs du monde entier qui s'intéressent à la question du *corps*, y compris des écrivains, des cinéastes ou des chorégraphes... Avec environ cent pages dans sa première édition, ce livre relativement court contient néanmoins un immense contenu offrant le panorama des problèmes posés par notre corps. Riche en informations et en méditations, appelé « le *Peri Psykhès* de notre temps » par Jacques Derrida, il reste aujourd'hui encore à être lu et relu, déchiffré et interprété, examiné et développé. C'est pour cette raison que nous proposons la première partie du *commentaire* sous sa forme plutôt traditionnelle ; on trouvera ci-après les (res) sources aidant à discerner les contextes historique, culturel ou philosophique de ce petit *magnum opus*.